

齋藤諸平の分団教授に関する研究

A STUDY ON SHOHEI SAITO'S GROUP TEACHING

山中 良昭
Yoshiaki YAMANAKA

1. 研究の目的、対象と方法

児童・生徒に能力差があるのは、動かすことのできない現実である。能力差のある児童・生徒を前にどう授業を組み立て展開していくかについては、教師であれば一番気を使い、苦心するところである。

日本の教育史において、大正から昭和初期にかけて、個性尊重や自発性発揮を主とした新しい教育「大正自由教育」が展開された。そして、その時期に教授法の一形態として能力別指導、当時の名称で言えば、「分団教授」が存在した。

岡山市出身の齋藤諸平は、奈良女子高等師範学校附属小学校（以下、奈良女高師附小）で訓導として（1911年<明治44>～）、岡山県浅口郡玉島尋常高等小学校（1915年<大正4>～）、岡山県都窪郡倉敷尋常高等小学校（1921<大正10>～1930年<昭和5>）で校長として、分団教授の研究と実践を旺盛に行った。分団教授は学年や学級の児童を考査や平素の観察などによって、「優等児」「普通児（中等児）」「劣等児」の能力別の分団に分け、授業または学級編成において分団別の教授を行うという、一つの教授法である。齋藤諸平は能力も個性の一つであるという立場から、奈良女高師附小時代から分団教授を推進した。しかし、齋藤の行った分団教授は、当時次々と起こる新しい教育理論や教育方法に影響を受けながら、その形態を変えていく。

本研究は齋藤諸平の分団教授を対象とし、分団教授の理論と実践の具体的方法を明らかにすることを目的とし

ている。それは現代の教育のあり方を考えることでもある。この研究によって、習熟度別指導に象徴される現代の能力別指導をとらえなおし、様々な能力をもっている児童・生徒を生かす今後の教育のあり方について考察を行った。

研究の方法は、文献研究を基本としている。

2. 先行研究の概要

齋藤諸平についての研究はそれほど多くはないが、特別学級や「劣等児」教育についての視点からの研究と、ドルトン・プランの視点からの研究などが中心に行われている。

（1）特別学級や「劣等児」教育について

*清水寛・迫ゆかり「大正自由教育と障害児教育[1] ー 齋藤諸平と倉敷小学校の特別学級（1）ー」『埼玉大学紀要 教育学

部（教育科学）』第38巻第2号、1989年（平成元）

*清水寛・迫ゆかり「大正新教育下における岡山県の『劣等児・低能児』教育の特徴」『特殊教育学研究』27巻 No.3、1989年（平成元）

（2）倉敷尋常高等小学校における新教育について

*鈴木和正「岡山県倉敷小学校における大正新教育実践の展開 ー地域社会が抱える問題とその対応をめぐってー」『中国四国教育学会 教育学研究ジャーナル』第

9号, 2011年(平成23)11月30日

(3) ドルトン・プランについて

＊吉良侯『大正自由教育とドルトン・プラン』 福村出版, 1985年(昭和60)

＊鈴木和正「プロジェクト・メソッドによるドルトン・プランの修正とその影響 ―岡山県倉敷小学校におけるアサインメントを手がかりとして―」中国四国教育学会 第63回大会 自由研究発表レジメ 2011年(平成23)11月19日

3. 論文の構成

本論文の構成は次のとおりである。

第1章 研究の目的, 対象, 方法

第2章 先行研究の概要

第3章 斎藤諸平の分団教授の変遷

第1節 奈良女子高等師範学校附属小学校時代の「分団教授」

第2節 玉島尋常高等小学校時代の「分団教授」

第3節 倉敷尋常高等小学校時代の「分団教授」

第4節 斎藤諸平の分団教授の実践とその変遷に関する考察

第4章 斎藤諸平の分団教授の理論の検討

第1節 理想と現実から生まれた分団教授

第2節 斎藤諸平は分団教授によって理想と現実 にどう対応してきたか

第5章 斎藤諸平の分団教授が教育実践に与えた影響

第1節 その後の倉敷尋常高等小学校

第2節 斎藤の分団教授が岡山県や日本各地の教育実践にどう影響を与えていたか

第6章 斎藤諸平の分団教授の現代の実践に対する意

味

第1節 終戦直後, 昭和20年代の能力別学級編成や分団学習の復活

第2節 現代の実践に対する意味

第7章 おわりに

4. 斎藤諸平の分団教授の変遷

奈良女高師附小と玉島尋常高等小学校における, 斎藤の実践した分団教授の形態は共通している。つまり, どちらも一斉教授の利点を生かした上で, 授業の一部分において分団教授を実施している。斎藤は一人一人の児童の能力に沿った教授を理想としている。しかし, 経済上の理由などから学級組織を改造することは困難であると認め, 一定時間で一定量の教授内容を受けることを利点とする一斉教授を容認している。また, 明治以降続いた画一的な一斉教授の弊害を説く一方, 一斉学習では共同学習によって興味を養成し相助け相励んで愉快地に学習できるなど, 児童の立場からの利点も説いている。その一方, 一斉教授では各人に適応した教育は難しいとし, 授業の一部分に実施する分団教授にその欠陥を補う役目を負わせている。

このような斎藤の分団教授の実践形態を大きく変えたのが, 倉敷尋常高等小学校における能力別学級編成の実施である。つまり, 倉敷尋常高等小学校において, 斎藤は異程度の能力をもった学級内の児童を対象にした分団教授ではなく, 学級編成の時点から児童を能力別に分け, 同程度の能力をもった学級内の児童を対象に学習を進めた。能力別学級を導入することにより, 分団教授の多様性が増した。従来の「劣等児学級」であった特別学級では, 固定式分団をつくることでいっそう児童の能力に沿った学習を行うことが可能になり, また, 普通学級では「独自学習」, 「協同学習」(奈良女高師附小の「相互学習」にあたるもの)を主としながら, 可動式分団による学習

も可能になった。

このように、斎藤の分団教授は、大正自由教育の中で次々に湧き起こる教育理論や教育方法を取り入れながら、柔軟にその形態を変えていった。また、その一方、研究と実践の積み重ねの結果、当時から見て先進的で密な分団教授（学習）を創り上げていった。それらを象徴する事例を二点述べる。

（１）木下竹次の「学習法」の影響

ー斎藤諸平と木下竹次の分団観の違いー

倉敷尋常高等小学校の普通学級における分団を利用した学習は、奈良女高師附小主事木下竹次の「学習法」の影響を受けている。木下の「学習法」とは、子どもを学習の「主人公」としてとらえることを基本前提とし、「独自学習」－「相互学習」－「独自学習」という定式化された順序をふむ方法体系をもった学習方式である。

「学習法」は全国的に大きな影響を及ぼし、木下が名著『学習原論』を刊行した 1923 年（大正 12）には夏と冬に行われる講習会に 2401 名が参加し、また、この年に奈良女高師附小を参観した者は 2 万人を超えており、その影響力がいかに大きいものであったかがうかがえる。当然、斎藤も大きな影響を受ける。

「相互学習」では分団を利用した学習が展開されるが、斎藤と木下には分団観の違いがある。斎藤は、児童の能力には差があり、学校においては個性尊重の立場から、それら児童の能力を相応に発展させるために能力別に分団を構成し、その分団で学習することが必要だと説いている。

一方、木下は、児童の生来備わっている能力を見分けるのは難しいとし、分団は基本的に「優劣混合」で構成した。そして、分団学習において様々な能力をもった児童が切磋琢磨して学習することで、全体として児童の力が高まるとしている。

斎藤は研究を積み重ねた結果、「協同学習」（木下の「学

習法」では「相互学習」）においては、木下の提起した「優劣混合」の分団による相互研究を基本的に行いながらも、その学習過程に能力別の分団学習を取り入れた。倉敷尋常高等小学校における「協同学習」は木下の「学習法」を模倣したものではない。斎藤がこれまで主張してきた分団教授の方式を「協同学習」のなかに組み込み、倉敷尋常高等小学校なりの学習過程を構築した。

（２）倉敷尋常高等小学校におけるパークの理論の実践

斎藤は倉敷尋常高等小学校に着任した直後の 1921 年（大正 10）4 月から 9 月にかけて、欧米教育視察を行っている。斎藤はサンフランシスコ州立師範学校の教育実践、特に個別的自由進度の学習に感銘を受け、欧米教育視察において、二度も訪れている。サンフランシスコ州立師範学校の校長はフレデリック・リスター・バーク（Frederic Lister Burk）であった。バークは G.スタンレー・ホールから児童研究を学んで、それを公立学校の幼稚園の教育実践に直接に応用した後、サンフランシスコ州立師範学校の校長として、子どもの自発性を前提とする自学法の開発をしていた。

帰国してすぐに斎藤は尋常第 3 学年の一個学級において、半年間個別的自由進度の学習を試みた。バークの教育方法を実践するのは、我が国では斎藤が初めてであった。しかし、自由進度で学習した児童の状況を調査してみると、「優秀者」と称される児童でも表面的理解だけで終わっており、不徹底であることを発見した。この結果、個別的自由進度の学習は日本の学校の実情に合わない判断し断念する。

一方、斎藤は自由進度の長所を利用し、その弊害を除去する倉敷尋常高等小学校独自の学習法についての研究を進める。1923 年（大正 12）4 月より高等科第 1, 2 学年においてドルトン式自律学習の研究を始め、1924 年（大正 13）には、本格的にドルトン式自律学習（ドルトン加味移動式学習）を行った。また、同時に尋常第 5, 6

学年においては、算術科と地理において限定的自由進度による学習を始めた。

この限定的自由進度による学習とは、基本的に単元の最初と最後は一斉に学習し、中程の時間は能力別の分団になり、能力の優良な者は進度表をもとに自由学習を行い、それ以外の児童は教師の輔導を多くして学習するというものである。ここでも、斎藤は分団学習を活用している。

5. 斎藤諸平の分団教授の理論の検討

分団教授には二つの側面がある。一つは、児童の個性を尊重するという教育思想のなかで、児童の能力は生来同じではないという「能力不平等」を起因とするものである。したがって、児童の能力にそった学習、つまり、分団教授が必要とされる。(教育理想面としての分団教授)

もう一つは、就学状況が大幅に改善され、多くの児童が学校に通学するようになった反面、家庭環境の違いなどにより、児童間に大きな学力差が生じたことに起因するものである。したがって、学級の人数の多さという現実も加わり、能力別の「分団」を構成し教授する分団教授が必要とされる。(現実面からの分団教授)

斎藤は、理論的にも実践的にも分団教授(学習)が最高潮に達した倉敷尋常高等小学校時代において、児童の能力差を知能検査で科学的に測定する一方、現在の学力を考査によって判定し、理想面と現実面を合わせ備えた分団教授(分団学習)を展開しようとした。

6. 斎藤諸平の分団教授が教育実践に与えた影響

斎藤は書籍や研究会を通じて、自身の分団教授についての理論と方法を積極的に広めた。一方、岡山県の中で分団教授や能力別学級編成を採用する学校が出てきた。また、岡山県に対して特別学級設置や能力別学級編成を

意見具申する動きも見られた。ただし、それが斎藤の影響であるかどうかかわからない。

しかし、昭和初期になって、大正自由教育は衰退していく。訓育的な要素が強調されるようになり、それに伴い個性尊重を主な目的とする分団教授はさすがたを消していった。また、倉敷尋常高等小学校も斎藤の転任もあり、分団教授(学習)や能力別学級はさすがたを消した。

7. 斎藤諸平の分団教授の現代の実践に対する意味

分団所属について児童・生徒が自ら判断するのか、教師が指定するかは、その時の実態によって判断するとして、教材に対する能力別の分団をつくり、学習を進めていくことは可能である。

避けなければならないことは、「能力別という言葉を正確に分析することなく、「能力別=悪」という単純な構図のなかで、「平等」を前面に打ち出し、様々な能力をもった児童・生徒を画一的・一律的に指導することである。

斎藤が分団教授の必要性を説くなかで強く訴えたように、画一的・一律的な指導を繰り返すことによって児童・生徒の能力を開花させないばかりか、学習意欲そのものが失われる児童・生徒が出てくる可能性がある。

教育における「平等」には、児童・生徒の能力に沿った学習をするという意味が含まれている。この意味で、斎藤諸平の分団教授は、日本国憲法第26条「すべての国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。」の理念を達成していく一つの手がかりになるのではないかとと思われる。

8. おわりに

斎藤は個性尊重に対する強い信念を一貫して持ち続けてきた一方、教育実践は実に柔軟であった。大正自由教育のなかにあつて、国内外から様々な教育思想、教育方法が斎藤のもとにも流入してきているが、それらを全面

的に模倣することなく、新しい教育思想や教育方法を検討し、研究と実践を繰り返すことで独自の教育を構築している。

参考文献

<斎藤諸平の著作物>

- ・斎藤諸平・清水甚吾『分団教授の実際』 弘道館 1915 年（大正 4 年）
- ・斎藤諸平・兒子喜六『発動主義分団教授一斑』 中文館 金正堂 1919 年（大正 8）
- ・斎藤諸平『教育理想の研究』 廣文堂 1924 年（大正 13）
- ・斎藤諸平『学習輔導の原理と実際』 廣文堂 1926 年（大正 15）
- ・斎藤諸平『教育診断に基調する学級教育の実際』 実文館 1929 年（昭和 4）
- ・斎藤諸平『結婚 50 周年記念 明宝荘の回顧 我が 70 余年の自叙録』 1956 年（昭和 31）

<倉敷尋常高等小学校関係出版物>

- ・『倉敷尋常小学校ニ於ケル 優等児並ニ劣等児教育ニ関スル研究』 岡山県倉敷町児童教育研究会 1923 年（大正 12）
- ・『倉敷小学 教育実際要覧』 岡山県倉敷小学校 1925 年（大正 14）
- ・金谷 鼎『ドルトン式自立学習の実際』 岸田書店 1925 年（大正 14）
- ・『国民的人格教育実際体系 第一集』 倉敷尋常高等小学校 1929 年（昭和 4）
- ・『国民的人格教育実際体系 第四集』 倉敷尋常高等小学校 1929 年（昭和 4）
- ・渡辺唯雄『我校教育の実際』 岸田書店 1933 年（昭和 8）

- ・九十年のあゆみ編集委員会『九十年のあゆみ』 倉敷市立倉敷東小学校 1964 年（昭和 39）

<斎藤諸平に関する研究論文>

- ・清水 寛・迫 ゆかり「大正自由教育と障害児教育[1] —斎藤諸平と倉敷小学校の特別学級（1）—」『埼玉大学紀要 教育学部(教育科学)』第 38 巻 第 2 号 1989 年（平成元）
- ・清水 寛・迫 ゆかり「大正新教育下における岡山県の『劣等児・低能児』教育の特徴」『特殊教育学研究』第 27 巻 No.3 1989 年（平成元）p 31~43
- ・吉良 僕『大正自由教育とドルトン・プラン』 福村出版 1985 年（昭和 60）

<大正、昭和初期の教育に関する研究書、論文など>

- ・中野 光『大正自由教育の研究』 黎明書房 1998 年（平成 10）
- ・小原国芳『日本新教育百年史 中国・四国』 玉川大学出版部 1869~71 年（昭和 44~46）
- ・及川平治『分団式各科動的教育法』 弘学館 1915 年（大正 4）
- ・西村槌太郎『及川平治のカリキュラム改造論』 黎明書房 1976 年（昭和 51）
- ・国立教育研究所編『日本近代百年史』 財団法人教育研究振興会 1974 年（昭和 49）
- ・真田幸憲『分団教授原義』 目黒書店 1918 年（大正 7 年）
- ・『岡山県教育会誌』 私立岡山県教育会 136 号 1916 年（大正 5）
- ・天野正輝「明治末・大正期における指導 『個別化』の歴史的背景 —能力別学級編成を中心に—」『東北大学研究年報』第 27 巻 1979 年（昭和 54）
- ・『附属小学校九十年史』 岡山大学教育学部附属小学校 1966 年（昭和 41）
- ・木下竹次、中野光『学習原論』 明治図書出版 1972

年（昭和 47）

- ・戸崎敬子『新特別学級史研究 ―特別学級の成立・展開過程とその実態―』 多賀出版 2000 年（平成 12）
- ・村田晃治「戦前の能力別学級編成等の変遷」『花園大学研究紀要』第 13 号 1982 年（昭和 58）
- ・村田晃治「戦後の能力別学級編成の変遷」『花園大学研究紀要』第 14 号 1983 年（昭和 59）
- ・宮本健市郎『アメリカ進歩主義教授理論の形成過程』 東信堂 2005 年（平成 17）
- ・倉澤栄吉『倉澤栄吉 国語教育全集 3 国語学習指導の本義』 角川書店 1987 年（昭和 62）